

富山県美術館開館5周年記念 蜷川実花展

2022年3月19日(土) - 5月15日(日)

現代日本を代表する写真家・映画監督の蜷川実花の北陸最大級の展覧会を開催します。蜷川は、色彩豊かで生命力に満ちた植物の写真や、被写体となる人物の本質に迫る魅力的なポートレート、ドラマチックな映像作品などで、国内外で多くの人を魅了しています。本展では、植物や人物の内に宿る生命のリアルや「今」という時代を色鮮やかに映し出した蜷川実花の「桜」シリーズなどの代表作や新作の写真をご紹介しますとともに、当館の空間を活かした映像によるインスタレーションなどを発表する特別な機会となります。夢のように美しくも儚く、そして希望に満ちた蜷川実花の世界をどうぞお楽しみください。



蜷川実花《タイトル未定》2021年
© mika ninagawa, Courtesy of Tomio Koyama Gallery.

- 一般 1,400(1,200)円
- 大学生 1,000(800)円
- ※ ()内は20名以上の団体料金

富山県美術館開館5周年記念 西洋絵画400年の旅

一珠玉の東京富士美術館コレクション展一

2022年9月17日(土) - 11月20日(日)

1983年東京都八王子市に開館した東京富士美術館は、日本・東洋・西洋の各国、各時代の絵画・版画・写真・彫刻・陶磁・漆工・武器・刀剣・メダルなど様々なジャンルの作品約30,000点を収蔵しています。とりわけ西洋絵画コレクションは、16世紀のイタリア・ルネサンス絵画から20世紀の現代絵画まで、西洋絵画史をほぼ一望できる、時間的・空間的に極めて充実したものとして、日本はもとより国外でも広く知られています。本展では、厳選した珠玉の83点により、16世紀後半から20世紀までの西洋絵画400年の歴史を紹介します。モネやルノワール、セザンヌ、ゴッホ、ゴーガン、シャガールなど近代の人気作家に加え、それ以前の歴史をたどるために、ティントレット、フランス・ハルス、アントニー・ヴァン・ダイクなど、日本ではあまり見る機会のない巨匠たちの作品も紹介します。



クロード・モネ《睡蓮》1908年
©東京富士美術館イメージアカイブ/DNPartcom

- 一般 1,400(1,200)円
- 大学生 1,000(800)円
- 一般前売り 1,200円
- ※ ()内は20名以上の団体料金

まるごとTADこども美術館

富山県美術館開館5周年記念

宮城県美術館所蔵 絵本原画の世界2022

2022年5月28日(土) - 7月5日(火)

毎月一つの物語を様々な分野の作家が手掛けるという、画期的な絵本として1956年に生まれた福音館書店の月刊絵本「こどものとも」。創刊から60年以上を経て、日本の絵本文化が、子どもから大人にまで親しまれるものとなったことを象徴する本となりました。『ぐりとぐら』や『はじめてのおつかい』など誰もが一度は目にしたことのある作品をはじめ、「こどものとも」の草創期に関わる重要な作家や、「こどものとも」を契機に活躍した作家、当館にも作品が所蔵されている作家など、34作家の絵本原画約350点をご紹介します。

- 一般 900(700)円
- 大学生 450(350)円
- 一般前売り 700円
- ※ ()内は20名以上の団体料金



同時開催
START☆2022

富山県内の小・中・高等学校5校の作品を紹介します。

○会場：TADギャラリー 観覧無料



林明子《はじめてのおつかい》表紙・裏表紙原画
(1976年3月「こどものとも」240号掲載) 宮城県美術館蔵

富山県美術館開館5周年記念 デザインスコープ

2022年12月10日(土) - 2023年3月5日(日)

はるか遠くの星々を観測できる望遠鏡(テレスコープ)、ちいさな微生物や細胞を観察できる顕微鏡(マイクロスコープ)。人間はレンズを用いた観測器具を使って目に見える世界を広げ、新たな技術や価値観を生み出してきました。本展では、「デザイン」というレンズを通した視点を「デザインスコープ」と名付け、現代日本を眺めてみたいと思います。デザインの視点で拡大・縮小してみると、世界はどのように映るでしょうか。企画にあたっては現在第一線で活躍するデザイナーやアーティストと対話を重ね、これからデザインがどのような提案をできるのか、またデザインとアートが限りなく近づく現在の状況を検証します。本展のための新作や、からだ全体で空間を楽しめる展示を通して、新世代が持つ創造的なエネルギーや、デザインにふれる楽しさや驚き、次世代に向けた可能性を、ここ富山の地から発信していきます。



三澤遥《動紙》2018年 写真：林雅之



鈴木康広《空気の人》2007/2017

- 一般 1,100(850)円
- 大学生 550(420)円
- 一般前売り 850円
- ※ ()内は20名以上の団体料金

富山県美術館開館5周年記念 ミロ展

一日本を夢みてー

スペインのバルセロナで生まれた芸術家、ジュアン・ミロ(1893-1983)。20世紀を代表する巨匠としてその名は日本でも広く紹介されていますが、ミロが若い頃から日本に憧れ、日本文化に造詣が深かったことはあまり知られていません。一方の日本でも、ミロの作品は1930年代から紹介され、1940年には単行書が世界に先駆けて刊行されるなど、早い時期から人々に親しまれてきました。また、ミロは1966年の初訪日以来、富山県出身の詩人・美術評論家の瀧口修造と親交を深め、ふたりによる共作も手がけています。本展は、ミロと日本の関係に注目した初となる展覧会です。スペイン、ニューヨーク、日本各地から集結するミロ作品、そしてアトリエに残された日本の民芸品や多彩な関連資料等を通じて、ミロ芸術と日本文化の意外なほどに深いつながりをご紹介します。



ジュアン・ミロ
《絵画(カタツムリ、女、花、星)》1934年
国立ソフィア王妃芸術センター
Photographic Archives Museo Nacional
Centro de Arte Reina Sofia, Madrid
©Successió Miró/ADAGP, Paris&JASPAR,
Tokyo, 2022 E4304

- 一般 1,100(850)円
- 大学生 550(420)円
- 一般前売り 850円
- ※ ()内は20名以上の団体料金

富山県美術館開館5周年記念

生誕120年 棟方志功展

2023年3月18日(土) - 5月21日(日)

「世界のムナカタ」として国際的な評価を得た版画家・棟方志功(1903-1975)。一心不乱に板木に向かう棟方の姿は、多くの人々の記憶に刻み込まれています。棟方が居住し、あるいは創作の拠点とした青森、東京、富山の三つの地域は、それぞれに芸術家としての棟方の形成に大きな影響を与えました。棟方の生誕120年を記念し、各地域の美術館(当館、青森県立美術館、東京国立近代美術館)が協力して開催する本展では、棟方と各地域の関わりを軸に、版画、倭画、油彩画といった様々な領域を横断しながら、本の装丁や挿絵、包装紙などのデザイン、映画・テレビ・ラジオ出演にいたるまで、時代特有の「メディア」を縦横無尽に駆け抜けた棟方の多岐にわたる活動を紹介し、棟方志功とはいかなる芸術家であったのかを再考します。



棟方志功 撮影・原田忠茂

- 料金未定
- ※ 決定次第、当館ホームページにてお知らせいたします。

